

体験版 「母娘、陥落の宴」

優心が東京から帰省した。自宅に入った優心を玄関に出迎えた母親に違和感を持った。笑顔で迎えてくれた母は美しかった。自慢の母だ。

首輪？犬の首輪だ。

母は犬の首輪を填めていた。ファッションとは思えない。淑やかな母はそんなことはしない。真紅の首輪には、リードがついてる。母が動くたびにどこからか鈴の音が聞こえた。

「似合うかしら？わたし、気に入っているのよ」

首輪への視線に気づいた母はそう言い、小首をかしげて白い歯を見せた。ぼくの返答を待たずに母はリ

ビングに向かった。やはり鈴の音が鳴っている。

リビングには友人の江島大和と藤根仁がいた。ソファに座っていた。姉の亜子も母と同じように犬の首輪をしていた。母と同じ真紅の首輪でリードがつけられている。大和がリードの握り手を持っていた。姉は大和が座っているソファの隣で正座している。姉と母の姿を交互に見た。姉も微笑みを浮かべている。心臓がどくりと早鳴った。

「優心、久しぶりだな。元気でやっていたかい？」

「東京は慣れたか？お前、東大生だもんな。すごいよ」

大和と仁に話しかけられても母と姉が気になって仕方がない。大和の手が何気なく寄り添うように正座している姉の髪を撫でた。姉は撫でられるのが当た

り前だというように微笑みをたたえたまま首を大和のほうに傾けている。正座している首輪姿の姉はまるでペットのように見える。

「まだ東京の生活には慣れないよ」

会話を交わすが、胸騒ぎが止まらない。声がこわばっている。

母が紅茶を入れてくれた。ソファの前のテーブルに3つのカップを置くと、仁の座るソファのとなりに正座した。リードの先を捧げ持っている。それを仁が握った。またどくりと心臓が早鳴った。どうなっているのか問いたただすのがこわかった。母が美しい顔を向けてつぶらな瞳で見つめてきた。

「優心さん、聞いて・・・わたし・・・仁さんの奴隷として飼っていただいているの」

正座している母の言葉に耳を疑った。母は確かに奴隷だと言った。友人に飼っていただいている？ どういうことだ？

「お前達の体を見せれば優心にも分かるさ」

大和がリード紐を引いて姉を立たせた。母も姉と並ぶように立った。母と姉がワンピースの背中ファスナーに手を回して下ろしていく。肩から外すと乳房が見えた。母も姉もブラをしていなかった。母と姉の乳房を見ることへの背徳感を感じながらも目をそらすことはできなかった。